

II 都市生態学と都市コミュニティ

7. アーバニズム理論批判

(1) 比較都市社会学からの批判

●ショウバーク『前産業型都市』

- ①都市を規定するのは、テクノロジー、権力、文化的価値、都市（人口の集中）。
- ②ワースの理論は、テクノロジーの水準の異なる「前産業型都市」には当てはまらない。

●前産業型都市では、（定義によって）近代的なテクノロジーがなく、流動性が低く、しばしば上流階級が都市の中心部を占め、身分構造が厳格である。また、宗教的権威の中心地でもあり、世俗化は進んでいない。

●しかし、前産業型社会の都市と農村を比較していない。また産業型都市では当てはまるか？

(2) 都市コミュニティ研究からの批判

●都市においてもコミュニティは存続している。

●W.F.ホワイト『ストリート・コーナー・ソサエティ』

ボストン（イースタン・シティ）のノース・エンド（コーナーヴィル）のイタリア系スラムに関する研究。

スラムもひとつのシステムであるとして、社会解体論を批判。

「中産階級の人には、スラム地区は恐るべき混乱の塊、社会的カオスに見える。しかし、内部の者の眼にはコーナーヴィルは、よく組織され統合された社会システムと映る」（1988, p.xvi 訳 p.94）。

「コーナーヴィルの問題は組織がないためでなく、その社会組織が周囲の社会構造とうまくかみあわない点にある。だからその地域の政治組織ややくざ組織が発達し、忠誠心ある人びとはイタリアとか自分の民族に目が向くのである」（1988, p.273. 訳 p.423）。

「私が予期していたように、まだましなスラム研究の著者のひとりであるルイス・ワースから鋭い攻撃を受けた。彼はまず私にスラムの定義を問うことから始めた。彼の質問の意図は明らかだった。ノースエンドは、実際は多くの結束の固いグループとしてのまとまりを含む、高度に組織化された社会であると私自身ずっと論じてきたので、それ以前のスラム研究の中心テーマであった「社会解体」という概念を持ち出すことなく、私がどのようにスラムを定義できるのか、彼は理解できなかったのだ」（1988,p.356.奥田・有里訳 p.351）。

cf.ワース『ゲッター』、ゾーボー『ゴールドコーストとスラム』

- ハーバート・ガンズ『都市の村人たち』（1962年）
ボストンのウェスト・エンドのイタリア人街の研究



現在のボストン中心部、ウェストエンド、ビーコンヒル、ノースエンド

- アクセルロッド「都市構造と社会参加」（1956年）
フォーマルな集団参加よりも、インフォーマルな社会参加のほうが広範に見られる。
フォーマル集団に参加している人のほうが、インフォーマル参加が多い。
第一次の関係の存続を数量的な調査によって実証。第二次の関係が第一次の関係によってかわるといふ命題を否定。
ネットワーク研究のさきがけとなる。

（3）社会構成理論

- 生態学的変数よりも都市の社会構成（階級・家族周期段階・人種-民族の構成）のほうが重要。

- ハーバート・ガンズ「生活様式としてのアーバニズムとサバーバニズム」（1962年）
インナーシティ、アウターシティ、郊外にわけて、従来の研究を検討。

「1. 生活様式に関して、インナーシティは、アウターシティや郊外とは異なっている。後の2つは、ワースのアーバニズムとほとんど類似性のない生活様式を示している。
2. インナーシティにおいてさえ、ワースの記述に似た生活様式は限られたものでしかない。さらに、経済的条件、生活周期段階、住民の流動性は、人口、密度、異質性よりも、生活様式をずっと満足に説明する。
3. 都市と郊外の物理的その他の違いは、しばしば見かけ上のものであるか、生活様式にとってあまり意味のないものである」（Gans 1962b, p.639）。

「社会学者は、生活様式が都市的だとか郊外的だとかいうべきではない」(Gans 1962b, p.644)。

- 独立変数としての「都市」の重要性を否定。住民の社会的属性を重視。
しかし、1)個人属性に還元できない、生態学的要因にもとづく違いもある。
近所づきあいの作法としての「擬似一次的关系」。
- 2)属性からさらにさかのぼって、その原因(貧困・教育の欠如など)を明らかにする必要がある。

「属性は行動の原因を説明するものではない。むしろ、社会的に生みだされ、文化的に規定された役割、選択、需要の手がかりである。因果分析は、属性からさかのぼって、役割が演じられる状況や、選択や需要の文化的内容——その達成の機会だけでなく——を規定する、より大きな社会的、経済的、政治的システムにまでたどりつかなければならない。……かくして、インナーシティの剥奪された住民の生活様式の完全な分析は、低所得や教育の欠如や家族の不安定性を示すことでとどめることはできない。これらは、都市経済が低賃金労働者を「必要」としていることや、住宅市場が居住地の選択を制限しているといった条件と、関連づけられなければならない。」(Gans 1962b, p.641-642)。

(4) 構造論的アプローチ

- 古典的な例として、リンド夫妻『ミドルタウン』(Middletown: A Study in Modern American Culture. 1929)『変貌するミドルタウン』(Middletown in Transition: A Study in Cultural Conflicts. 1937)。

- アメリカ中西部、インディアナ州マンシーの調査

- 選定理由(1)「その都市は可能な限り、現代アメリカ生活を代表していなければならない」
(2)「全体状況的研究において十分扱いうるほどに小規模であり同質的でなければならない」

選定理由(1)

- ・温和な気候
- ・相当に成長率が高く、現代の社会変動に伴って発生する苦難が各種にわたって十分成長していることが確実であること。
- ・ひとつの工場によって市の産業が支配されていないこと。
- ・工業活動に比肩しうる固有な地方芸術的生活。
- ・顕著な特異性が存在しないこと。
- ・中西部に存在すること。

選定理由(2)

- ・人口2万5千人から5万人(1920年)
- ・可能な限り自足性をもった都市であり、衛星都市でない。
- ・黒人および外国生まれ人口の少ない都市。

●調査時期『ミドルタウン』1924～1925年

『変貌するミドルタウン』1935年

●1870年代から1925年までの社会構造の変化を記述。

1886年 天然ガスブーム →急にガスが出なくなる。

しかし、この時期に工業化の基礎を形成。

●「ビジネス階級」と「労働者階級」の2つの階級からなる社会構造を軸に記述。

労働者階級・・・物を扱う 71%

ビジネス階級・・・人を扱う 29%

「ミドルタウンに特に際立った裂け目をなしているのはなによりもこの、労働者階級とビジネス階級への分化である」。

- ・工場の機械化・量産化→熟練の解体→半熟練化。

労働は次第に生活費獲得の手段となる。労働者階級は、独立小製造業者への道を断たれる。

- ・「映画と自動車の出現」、広告と信用販売の普及。消費水準の上昇、耐久消費財の普及。

→ビジネス階級の生活が標準化。

労働者階級の生活基盤が脆弱化。

「労働、ビジネスの両階級にとって、生活費獲得行動の他の付随物はいずれも、仕事によって受ける金銭ほどの重要性はもっていない。生活活動のますます多くがドルの印のついたかんぬきで締め上げられていくようになるにつれて、ミドルタウンの住民を激しく働かせているものが仕事自体のもつ本質的な満足であるよりは、このような事後の報酬という手段的側面に傾いてくる。ビジネス集団の間では、自分の友人仲間、自分の運転する車の種類、ゴルフ、ロータリークラブ加入、自分の所属する教会、自分の政治信条、妻の社会的地位といった事柄が、ミドルタウンでは生活費獲得という本務にとって手段的なつながりをもってきたので、それらに以前よりも大分細かい注意を払う傾向がはっきり現れている」(訳 p.83)。

「ビジネスマンと労働者のいずれもが、自分たちの稼ぐ金銭を、それより急速に成長する自分たちの主観的欲望に一致させる営みに、必死になって奔走しているように思われる」(訳 p.88)。

●1935年、ミドルタウン再訪

- ・ミドルタウンの社会構造は基本的に変わっていない。

- ・しかし、1929年以降の不況によって、階級分裂は深刻化。
- ・「オープンショップ制の町」として、GM工場を再誘致。
- ・地元の小実業家と労働者階級は、全国企業と全国的労働組合に翻弄される。
- ・個人の独立と地域の自治を強調するミドルタウンの文化は、階級的に引き裂かれつつあった。
- ・都市全体をコミュニティとして捉え、コミュニティの解体と分裂を中心に据える。
しかし、小工業都市であったからこそできた調査。

「ミドルタウンは、働くことを求めるすべての人びとに行き渡るにはあまりに職が少なく、それでいてまったく同じ時に、手招きはしても構ってもらえないので作用を止めている社会的に有用な機能が数多く存在する都市であるが、その住民にあえられている職業の配置を見渡した場合、小都市というものが明らかにそれ固有の職業分布の型を持っている事実に強い印象を受ける。この型は農村や小さな町の型よりも多様性に富んでいるが、大都市のそれよりは多様性に欠けている。大きさがさまざまに異なる地域社会がそれぞれどのような型の生活費獲得様式を持つかについては、そのすべてが今後の分析を必要とする問題である」。(訳 p.318)